「初穂の祭り」と「七週の祭り」の奥義

「週の初めの日」と「五旬節の日」に与えられた「聖霊」という賜物

ベレーシート

●今回は、レビ記 23 章に記されている「主の例祭」にある「**初穂の祭り**」と「**七週の祭り**」について取り上げます。この祭りはいずれも一日の祭りで、50 日の開きがあります。「**二つで一つ**」の祭りといっても過言ではありません。それゆえ、今回はこの二つの祭りを取り上げます。

●「初穂の祭り」は、「過越の祭り」のあとに来る最初の安息日の翌日です。ユダヤ教の安息日は土曜日ですから、「初穂の祭り」は「週の初めの日」つまり日曜日の祭りです。この日にイェシュアが復活されたのです。そしてその日の夕方に与えられたのが「**いのちを与える御霊**」です。実は、この日からエックレーシア(教会)は始まっているのです。そしてその日から七週を経た翌日が「**七週の祭り**」です。「五旬節(50)」とも言います。この日に「**力(権威)としての御霊**」が与えられた記念すべき日です。それらは、いずれも、すでに包括的・一回的に与えられました。それが歴史の中で継続的に注がれているのです。

初穂の祭り	40 日の顕現	七週の祭り(五旬節)
秘密の昇天		公の昇天後
初穂の「大麦の束」 を奉献物として献げる		初穂の「小麦粉で作ったパン種入りの二つのパン」 を奉献物として献げる
週の初めの日に		五旬節の日に
復活前の約束「いのちを与える御霊」		復活後の約束「力を与える御霊」
人の霊の内側の満たし (プレーロー：πληρόω)		上からの外側の満たし (ピンプレーミ: πίμπλημι)＝ 聖霊のバプテスマ
王なる祭司の回復		

●私は、ある原稿を依頼されて書き送りました。しかしその原稿の中に記した二つの言葉が跳ねられました。その二つの言葉とは、「秘密の昇天」と「公の昇天」です。「馴染みがない」というのが一番の理由でした。これが「理解の型紙」であり、強い表現を使うなら「ストイケイア」なのです。「馴染みがない」ということで跳ねられるのであれば、その言葉の真意が開かれる(尋ね求められる)ことはまずありません。「たましい」から「霊」の世界に渡って来ることも決してありません。今回のメッセージは、その「秘密の昇天」と「公の昇天」によって与えられた「聖霊」という神の賜物についてです。

1．「秘密の昇天」

●イェシュアが復活されたその日について考えてみましょう。墓に来ていたマグダラのマリアがイェシュアに触れたときに、こう言われました。

> 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 20 章 17 節
> ・・・「わたしにすがりついていてはいけません(現在命令形)。わたしはまだ父のもとに上っていないのです。わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」

●しかし、このあとイェシュアが父のもとに上ったのを見た者はだれ一人いません。「父のもとに上る」という情報を聞かされただけです。ですから、これを「**秘密の昇天**」と呼んでいるのです。これは、使徒 1 章 9～10 節にある「**(公の)昇天**」とは明らかに区別されるべきです。「公の昇天」の記述はこうです。「こう言ってから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。イエスが上って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた」とあるように、使徒たちがイエシュアの昇天を確認しています。

●ところでイェシュアはなぜ父のもとに上る必要があったのでしょうか。それは「**初穂の祭り**」を成就するためです。私たちが旧約の「主の例祭」を重要視していなければ、このことの意味は分かりません。同時に「仮庵の祭り」の重要性にさえも気づきません。教えられたことがないから、あるいは教えられても、それが教会で重要な事柄として扱われていないからです。私も長い間、無知でした。しかし徐々に開かれてきました。聖書はイスラエルを基軸として書かれており、神のご計画はレビ記 23 章に記されている「主の例祭」に沿って成されるのです。それは、神の歴史におけるマスタープラン(計画書)なのです。

●イェシュアは復活された日、天に上って夕方に戻って来るまで何をしておられたのでしょうか。そのことを考えてみましょう。「初穂の祭り」は大麦の束を献げる祭りで、安息日の翌日と決まっています。つまり一日の祭りです。イェシュアは復活のからだを「初穂の束」として、御父に献げる必要があったのです。イスラエルの民が「初穂の祭り」に献げて来た「大麦の初穂の束」の「大麦」は復活を象徴し、その「束」(オーメル：עֹמֶר)は単数・男性であることから、それはイェシュアを啓示する型です。さらにこの束を受け取った祭司は、それを「**奉献物**」として献げました。「奉献物」のことを「テヌーファー：תְּנוּפָה」といい、語源「ヌーフ：נוּף」(揺り動かす)の通り、手前に引き寄せるように揺り動かして献げることから、「揺らすささげ物」(回復訳)とも訳されます。それはイェシュアの死と復活の時に、いずれも「地震」が起こることを予表するものでした。予め、そんなことまでが神によって定められていたことが驚きです。

①イェシュアが十字架上で死んだ時

【新改訳 2017】マタイの福音書 27 章 51 節
すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、

●「すると見よ」とは、イェシュアが「大声で叫んで霊を渡された」つまり「死んだ後」です。その時に地震があったことを記しています。「神殿の幕が裂けた」とは、イェシュアの十字架の死により神と人との道が開かれて、人

が自由に神に近づくことが可能となったことを啓示する出来事です。まさにその時に「地が揺れ動き、岩が裂け」たのです。

②イェシュアが復活した時

【新改訳 2017】マタイの福音書 28 章 2 節
すると見よ、大きな地震が起こった。主の使いが天から降りて来て石をわきに転がし、その上に座ったからである。

●ここでの「すると見よ」は、「安息日が終わって週の初めの日の明け方、マグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行った」ことが示され、その時に地震が起こっています。これはサタンの最後の砦とも言うべき「死」が打ち破られたことを啓示する出来事です。このようにイェシュアの死と復活において「**地震**」が起こっています。このことと「揺らすささげ物」(テヌーファー： תְּנוּפָה)に密接な関係が隠されていたのです。つまり「初穂の祭り」と「七週の祭り」は密接なつながりがあるということです。どんなつながりがあるのでしょうか。

●イェシュアが「初穂の祭り」に秘密の昇天をし、ご自身を「初穂の束」として御父に献げることで、その際に父から重要なものが与えられます。イェシュアはあらかじめ秘密の昇天をすることをご存知で、その際、父にお願いして与えられるものについて、最後の晩餐の時にすでに弟子たちに語っていました。

> 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 14 章 16～17、26 節
> 16 そしてわたしが父にお願いする(未来形)と、父は**もう一人の助け主**(παράκλητος)をお与えくださり(未来形)、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます(現在形)。
> 17 この方は**真理の御霊**です。世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ(原文＝あなたがたのそばに(παρά)とどまり(μένω))、また、あなたがたのうちに(中に=ἐν)おられるようになる(未来形)のです。
> 26 しかし、**助け主**、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる**聖霊**は、あなたがたにすべてのことを教え(未来形)、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます(未来形)。

●ここで語られた重要なことは、父が「**もう一人の助け主**」「**真理の御霊**」「**聖霊**」を与えてくださるということです。世はこの方を知ることがないとイェシュアは言っています。しかし弟子たちに対しては「この方を知っている(現在形)」つまり、やがて知ることになることを語っているのです。やがてとは、この方を弟子たちに与えるために、週の初めの日の夕方に、再び戻って来る時です。事実、イェシュアは天から地に戻って来られて、鍵がかけられていた戸をすり抜けて、弟子たちの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と二度も語り、「**息を吹きかけ**」て、それから「**聖霊を受けなさい**(受け取りなさい)」と言われたのです。この順序が重要です。「息を吹きかけ」たことで人の霊は回復したのです。その上で「聖霊を受けなさい」とアオリスト命令形で言われたのです。それは人が、回復された霊を活かして主体的・自覚的に聖霊を受け取ることを命じられたということです。この「**聖霊**」とは「**もう一人の助け主**」「**真理の御霊**」と同義です。これらはヨハネの表現ですが、パウロの表現だと「**いのちを与える御霊(霊)**」となります。この聖霊を弟子たちに与えて、弟子たちがこれを受け取るためには、イェシュ

アが秘密の昇天をする必然性があったのです。

2. 「夕方」の奥義

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 20 章 19 節
その日、すなわち週の初めの日の**夕方**、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。「平安があなたがたにあるように。」

●週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていました。そこに天から地に戻って来たイエシュアが彼らの真ん中に立ち、こう言われたのです。「平安があなたがたにあるように」と。

【新改訳 2017】創世記 8 章 11 節
鳩は**夕方になって**、彼のもとに帰って来た。すると見よ、取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が地の上から引いたのを知った。

●「夕方」(エレヴ：**עֶרֶב**)の初出箇所がこの箇所です。神のさばきとしての洪水の水が引いた頃、再度ノアは鳩を放ちます。すると鳩はオリーブの若葉をくわえて戻ってきます。「鳩」と「オリーブの若葉」の関係は、**地上に新しい時代が始まったことを知らせる象徴**です。「週の初めの日」とはイエシュアが死からよみがえった日です。**その日の夕方に**、戸に鍵がかけられていたにもかかわらず、そこを通り抜けられて、彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われました。「彼らの真ん中(ど真ん中)に立ち」も実に象徴的です。というのは、イエシュアの霊が弟子たちのど真ん中である霊の中に入る(内住する)ことになるからです。それは歴史の中で長い間隠されて来た神の悲願が、今ここに実現成就するということであり、そのことをイエシュアは「平安があなたがたにあるように」という言い方で表しました。たましいで読むなら単なる挨拶のことばと思ってしまいますが、イエシュアのことばは常に「霊であり、いのち」です。しかも「週の初めの日の**夕方**」に語ったことばは、**新しい時代が始まったことを知らせるしるしです。**「平安」は「シャーローム」(**שָׁלוֹם**)ですが、その語源は「シャーレーム」(**שָׁלֵם**)で「完成する、実現する、成就する」を意味します。そのような意味を持つことばを、しかも二度使うということは、「新しい時代が始まったこと」を強調しているのです。ですから「**週の初めの日の夕方**」は、とても重要なことが起こった記念すべき時(カイロス)なのです。その時がエックレーシアの誕生と言えるのです。

3. 「王なる祭司」の回復

●この聖霊を弟子たちが受け取ったことで、どうなるのでしょうか。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 20 章 21～23 節
21　・・「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」
22 こう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。
23 あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残すなら、そのまま残ります。」

●**聖霊を受け取ることの目的**は、「父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わ」すためです。しかし遣わされる前に、彼らがイエシュアの語った「御国の福音」を正しく理解し、悟ることが必要です。そのために、復活の夕べから 40 日の間、彼らはイエシュアから直接の指導と訓練を受けるのです。このことによって、初めて弟子たちは「**祭司**」として回復されるのです。回復だけでなく、その「権威」をも与えられます。それが「あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残すなら、そのまま残ります」ということばで裏付けられています。罪を赦すためには神の「権威」が不可欠です。その権威が祭司には必要なのです。人はエデンの園で「耕し、守る」という務めが与えられていました。それは「**王なる祭司の務め**」のことです。聖霊を受け取る目的は、この「**王なる祭司の務め**」を回復するためなのです。この回復を「神と人がともに住むための**再創造**」、あるいは「キリストにある**新創造**」とも言えます。特に祭司としての回復は、イエシュアの「40 日間の顕現」を通して十分に整えられたと言えます。その明らかな証拠が「**120**」という数に表されています。

> 【新改訳 2017】使徒の働き 1 章 15 節
> そのころ、百二十人ほどの人々が一つになって集まっていたが、・・

●「百二十人ほどの人々が一つになって集まっていた」という言及はとても重要です。なぜなら、この数字は彼らが「王なる祭司」として整えられたことを表しているからです。「百二十」は 12 の倍数です。黙示録 21～22 章は「新しいエルサレム」が記されていますが、そこには 12 とその倍数(24,144,12000)が満ちています。つまり、そこは「王なる祭司」たちで満ちていることが啓示されています。これは創世記 6 章にある神の宣言の成就です。

> 【新改訳 2017】創世記 6 章 1～3 節
> 1 さて、人が大地の面に増え始め、娘たちが彼らに生まれたとき、
> 2 神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、それぞれ自分が選んだ者を妻とした。
> 3 そこで、主は言われた。「わたしの霊は、人のうちに永久にとどまることはない。人は肉にすぎないからだ。
> だから、人の齢は百二十年にしよう。」

●「わたしの霊は、人のうちに永久にとどまることはない。人は肉にすぎないからだ。」と主は言われました。それゆえに、神の子らが自分の欲(おのが腹)を神とするようになったのを見て、多くの人は「人の齢は百二十年にしよう」を「神のさばき」として解釈しようとします。ですが、「だから」と訳された接続詞(ヴェ：וְ)には逆接(しかし)も含まれていることから、これは「人を**王なる祭司**としよう」という「**神の回復の宣言**」と言えるのです。それが、使徒の働きにある「百二十人ほどの人々」に実現しています。「百二十人ほどの人々」は、イエシュアの 40 日間の顕現によって、すでに「祭司」として十分に整えられていたことを示しているのです。これを「プレーロー」(πληρόω)ということばで括ることができます。「プレーロー」は「満たされた、成就した」を意味します。そして、公の昇天をするイエシュアから「キリストの証人」となるべく「上からの聖霊」を待つように命じられ、弟子たちはエルサレムにとどまっていたのです。こうしてイエシュアの公の昇天から 10 日目に、その聖霊がくだり、彼らは「満たされた」のです。この「満たし」が「ピンプレーミ」(πίμπλημι)です。これは警察官が制服を着るようなものです。この制服にこそ権威があります。この制服を着ていなければただの人です。上からの聖霊で満たされることで、「祭司」が王的権威をもつことができるのです。祭司の内側が聖霊で満たされていることを「プレー

ロー」(πληρόω)と言うのに対して、外側の権威に満たされていることを「ピンプレーミ」(πίμπλημι)と言います。これは「**二つで一つ**」の事柄なのです。祭司としての務めを権威をもって為すために、神の御座から注がれる聖霊に満たされる必要があるのです。それゆえ、この「ピンプレーミ」の奥義を悟ることこそが、「五旬節」の意義なのです。

4. 「五旬節」の奥義

【新改訳 2017】使徒の働き 2 章 1～4 節
1 **五旬節の日になって**、皆が同じ場所に集まっていた。
2 すると天から突然、激しい風が吹いて来たような響きが起こり、彼らが座っていた家全体に響き渡った。
(回復訳：すると突然、激しい風が吹いてきたように、天から音が聞こえ、彼らが座っていた家中を**満たした。**)

●新改訳では「響きが起こり、彼らが座っていた**家全体に響き渡った**」と訳されていますが、原文は回復訳が示すように、「**家の内側を満たした**(プレーロー：πληρόω)」とあります。これは器の内を満たしたことを意味しています。預言的・奥義的・象徴的な表現です。その上で以下のことが起こっています。

3 また、炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどまった。
4 すると皆が**聖霊に満たされ**、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた。

●4 節の「**満たされ**」は「ピンプレーミ：πίμπλημι」が使われています(4:8、31、9:17、13:9 も参照)。これは**人々を外側から包むようにして満たす**ことを意味します。外側から霊で満たすことで何が起こったのかといえば、内側にあるものが「**語り出される**」のです。それは口、舌によって、言葉で、あるいは賛美で語られるのです。その例が、ルカ 1 章 15 節、41 節、67 節にあります(預言的)。聖霊によってバプテスマされるとき、キリストを証しする力が与えられるのです。その力はどのようにして現されたでしょうか。それは、御霊が語らせるままに、**他国のいろいろなことばで話し始めたということ**です。これはやがてユダヤ人が諸国の民に御国の福音を伝えることの預言的なしるしです。単に、異言を語り出すようになったということではありません。事実、パウロは誰よりも異言で語った人でした(Ⅰコリント 14:18)。「皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた」というしるしは、世の終わりに、イスラエルの残りの者が「恵みと嘆願の霊」を注がれることで、「すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆」にイエシュアが伝えた御国の福音を告げ知らせることになるというしるしなのです。エックレーシアの場合も、イエシュアから大宣教命令が語られています。

【新改訳 2017】マタイの福音書 28 章 18～20 節
18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。
「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。
19 ですから、**あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい**。

父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、
20 わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。
見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

●使徒の働きの「**聖霊のバプテスマ**」は重層的です。エックレーシアに対しても、イスラエルの残りの者に対しても現される重層的なしるしなのです。また預言的というのは、神の計画はアブラハムに対して約束されたように、「地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」(創 12:3)とあるように、必ずユダヤ人から異邦人に福音が伝えられるのです。五旬節に弟子たちに「聖霊のバプテスマ」が注がれ、その後、異邦人であるカイサリアのローマ百人隊長とその家族に同じ聖霊のバプテスマが注がれているのも、そのことを表しています。そのために、その前にユダヤ人であるペテロの「理解の型紙」「固定概念」を壊すという周到な主の導きがなければなりませんでした。そのようにして、使徒の働き 10～11 章で異邦人が「聖霊のバプテスマ」を授けられています(使徒 11:16)。

【新改訳 2017】マタイの福音書 24 章 14 節
御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。

●このことばは、終わりの日に起こる文脈で語られています。つまり、最後に神によって立ち上がって来る「イスラエルの残りの者」によって「御国の福音」が全世界に宣べ伝えられ、すべての民族に証しされて、多くの異邦人が救われて来ることが起こり、それから、終わりが来ることをイェシュアは語っています。エックレーシアにも福音宣教の務めが命じられていますが、今日のエックレーシアは、初代教会が伝えた「御国の福音」とは異なった福音を伝えていることが問題です。つまり「御国の福音」についての正しい理解が必要なのです。使徒パウロも怯むことなく、御国の福音を伝えていたことが使徒の働き 20 章に記されています。御国の福音とは、「神のご計画のすべて」を含んでいます。パウロはそれを余すところなくエペソの教会で知らせたと述べています。パウロにしては最も長い三年をエペソでの働きに費やしました。その間、彼は怯むことなく、御国を語り続けたのです。御国について語るためには、昼も夜も、聖書をたましいではなく、霊を活用して学ぶ必要があります。アシュレークラスはそのための訓練の場です。

5. 「初穂の小麦粉で作ったパン種入りの二つのパン」を奉献物として献げることの奥義

【新改訳 2017】レビ記 23 章 15～17 節
15 あなたがたは、安息日(過越祭の後に来る安息日)の翌日から、**奉献物**(テヌーファー：תְּנוּפָה/揺り動かすささげ物)の**束**(オーメル：עֹמֶר、単数・男性)を持って行った日から**満七週間**を数える。
16 七回目の安息日の翌日まで五十日を数え、あなたがたは新しい穀物のささげ物(小麦の初穂によるパン)を主に献げる。
17 あなたがたの住まいから、**十分の二エパの小麦粉にパン種を入れて焼いたものを二つ、奉献物**(テヌーファー：תְּנוּפָה)**としてのパンとして持って行く。これは主への初物である。**

●大麦、小麦の場合には「奉献物」(テヌーファー：תְּנוּפָה)として献げます。ここで重要なことは、「七週の祭り(五旬節)」で奉献する「**二つのパン**」です。しかもこの「二つのパン」は小麦粉の初物で作ったパンであり、しかも「パン種を入れて焼いたもの」を祭司のもとに持って行かなければならなかったのです。一つのパンではなく、二つのパンです。なぜ二つでなければならないのでしょうか。それは「ユダヤ人」と「異邦人」が、やがてイエシュアによって一つにされるという奥義が隠されているからです。聖霊によってその真意が啓示されるまで、ずっと長い間、その必然性に覆いが掛けられてきました。「覆いが掛けられている」というのは、見えていても見えないという状態を意味します。しかし今や、私たちは一人ひとりキリストから受けた「注ぎの油」(Ⅰヨハネ 2:27)がとどまっているので、みことばが本来語ろうとしていたものを検証することができる時代に生きているのです。神の救いのご計画においては、今や新しい時代、つまり「聖霊の時代」が到来しているということです。

●最後に、近年アシュレークラスで「開かれた覆い」の最も大きなものを紹介して終わりたいと思います。それは、マタイ福音書 13 章にある「**種蒔く人のたとえ**」です。種蒔く人も、種もイエシュアのことです。これは難しくありません。難しいところは、8 節にある「また、別の種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍になった」の「百倍、六十倍、三十倍」という部分です。マルコではこれが逆になって「三十倍、六十倍、百倍」となっています。それぞれ 10 で割ると「3・6・10」になります。これをヘブル文字に換算するなら、それは「ゴーイ：גּוֹי」つまり「異邦人」となります。これは AC の石田保さんがそれほど考えずに口にしたそうですが、その意味を尋ね求めていた私にとって晴天の霹靂でした。しかし、それだけではこのたとえ話は解けません。肝心なのは「**良い地**」の理解です。これが「素直な心」ではなく、イエシュアの死と復活によって回復された「**人の霊**」(実際は「いのちを与える霊」と「人の霊」とがミングリングされた霊)のことだと知らされ、そこに種蒔く人であるイエシュアのことばが入ることで、多くの実を結ぶのだと悟ったのです。しかしそのことと御国の福音がどう繋がるのかが分かりませんでしたが、「シェーム・イエシュア」によって尋ね求めることで、ヨハネの黙示録 7 章の 144,000 人の「**イスラエルの残りの者**」とつながり、「**大勢の数えきれない**、殉教を余儀なくされる**異邦人**」へとつながったのです。このように、聖霊の働きによって御国のご計画がより明確に開かれて来たことを心から感謝しています。今日は「七週の祭り」「五旬節」ですが、イエシュアが二つのパンを一つにして、「**新しい一人の人**」として創造されるのは、エックレーシアの場合は「携挙」の時に、またイスラエルの残りの者と異邦人の場合はキリスト再臨の時、つまりメシア王国でそれが創造されるのです。

> 【新改訳 2017】詩篇 133 篇 1～3 節
> 1 見よ。なんという幸せ なんという楽しさだろう。兄弟たちが一つになって ともに生きることは。
> 2 それは 頭に注がれた貴い油のようだ。それは ひげに アロンのひげに流れて 衣の端にまで流れ滴る。
> 3 それはまた ヘルモンから シオンの山々に降りる露のようだ。
> 主がそこに とこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

三一の神の霊が、私たちの霊とともにあります。

2026. 5.24